

家持の造語

——カズナシの場合——

奥村 和 美

『萬葉集』の歌の言葉の中には、歌を詠むにあたって、そこで一人の作者の手によって新しく作り出されたと思われる言葉がある。あらたに語が形成される造語という事實は、歌のみならず広く上代の言語一般に見られる事實である。ただし、歌を詠むことの中で造語を考えると、それは、なお作者の意図に基づいた表現方法の一つとして捉えられるべき面を有する。造語という方法によって産み出される歌の言葉には、歌のどのような修辭があるのか。そして、そこに目指されている表現の新しいとは、どのような質のものなのか。それらの点に、いま、基本的な問題意識を置く。

造語の方法は、既存の言葉に分析を加え、とり出される語の構成にしたがって複数の要素を新規に結合することを中心とする。大伴家持における造語という問題は、したがって、作られた語一つのみにとどまらない。家持が既存の言葉、『萬葉集』に見られるところの先行する歌の言葉にどのような反省をもって対したのか、そして、一つの語にどのような新しい意味が形成されているかを問うことになる。その新しい意味が一首の歌において決定される以上、問題はさらに、造られた語が一首全体の表現にどうあずかっているのかというところに及んでいかねばならない。

そのことをカズナシという語を例に検討する。

カズナシという語は、『萬葉集』に三例しか見えない。(便宜、(一)(二)(三)の記号を付す。)

(一)世の中は加受奈積かすなせきものか春花の散りのまがひに死ぬべき思へば(17・三九六三)

(二)……古ゆ 言ひ継ぎ来らし 世の中は 加受奈積かすなせきものそ……(17・三九七三)

(三)うつせみは加受奈積かすなせき身なり山川のさやけき見つつ道を尋ねな(20・四四六八)

大伴池主の第二例が、家持の第一例を意識的に踏襲することは明らかである。第三例が家持の作であることを考え合わせれば、カズナシは、集中、家持の例を初出とし、家持周辺でしか用いられない孤立的な語であることがわかる。家持には、独自の表現を繰り返し用いる傾向のあることが指摘されている。つまり、カズナシという語の用例の家持への偏りは、それが家持の手になる新しい表現である可能性を示す。

「敬和歌」の第二例が家持との贈答の中で「世の中の 常しなければ」(17・二九六九)の部分に対応するように、「世の中」についていうときムナシ、ツネナシを用いるのが既にある表現である。カズナシは、まず第一例において、それらに対する新しい表現として置かれたと言える。

もっとも「世の中」をムナシと規定することじたい新しく、大伴旅人の「報凶問歌」に「世の中は牟奈之伎むなせきもの」(5・七九三)とあるのが最初の例である。それは、確かに「人もなきむな空むな家むな」(3・四五一)という存在の欠如を前提とする。しかし、「空言むなごころ」(11・二四六六)のムナが真に對する偽を意味するように、ここでムナシは、実体の有無を越えて、現象世界全てに對してそれが

偽りであり、それ故に信することができないという旅人自身の価値観を積極的に表わす。その意味においてこの判断は仏教の「世間虚仮」の思想を移し得ている。

形態的には、ムナナシと分析されるムナシよりも、ツネナシと分析されるツネナシの方にカズナシは近い。「世の中」をツネナシと規定することもまた新しい。「人の常無」(7・二二七〇古歌集)と人間についていうことはよく知られていたが、「世の中」についていう例は、天平年間末の「世の中を常無もの」と今ぞ知る(6・一〇四五)に初めて見える。ムナシは存在の欠如という空間的な捉え方を基本とするが、一方、ツネナシは、時間的な捉え方によって存在するもの有り方について規定する。ツネは、「十月しぐれの常か」(6・四二五九)とあるように、ある情態が変わらないことを主観的に断定する語である。つまり、ツネナシのツネは、カズナシのカズに比して情意をより多く含み、名詞性が低いと言える。

カズナシのカズが、「水の上に如^か数書^{かずかき}我が命」(11・二四三三)のカズ、即ち数え取ることのできる定まり、規矩の意を基本とするのであれば、カズナシは意義的には、ムナシ、ツネナシよりアトナシに近い。

「世の中」をアトナシと規定することは、家持の亡妾挽歌の「跡無^{あとな}世の中なれば」(3・四六六)に初めて見える。アトは「朝行く鹿の跡毛奈久」(8・二六二二)に明らかかなように痕跡の意で、アトナシは、そのようなたどることのできる跡形がないとらえどころがないことを意味する。亡妾挽歌の例は、カズナシに少しばかり先立ってなされた、家持の新しい表現への試みである。

ただ、アトナシがアトモナシと二語の結合の段階にとどまるのとは違って、カズナシが形容詞として一語化したところには、別の要素が考えられる。即ち、漢語「無数」の翻読語の可能性である。漢語「無数」は、数えきれないほどの多さの意とともに、天から与えられた定まりをもたないという意を有する。それは、先述の和語カズナシの意と一致する。カズナシのこの不定の意義は、存在するものをかたちの面から捉えて、ツネナシの表わすかたちの変容とアトナシの表わすかたちの消失との間に位置する。

以上のように、ムナシ、ツネナシという既存の表現に対して、アトナシ、カズナシを新しい表現とすると、そこに主観的な判断を含む表現から具象性をもったより客観的な表現へという態度のあることがうかがわれる。それを家持の表現態度全般に及ぼしていることは、いまはさしひかえねばならないが、その態度は、家持が自然描写の際、視覚印象の明瞭さを追求する傾向にあったことと矛盾するものではない。

家持の造語であるカズナシは、そのときどきの家持の表現と関わって、一回的な性格を強く帯びる。第一例でそれは、「世の中はしなもの」という仏教的な認識の形式にのっとってうち出される家持の現実把握を示し、第三例では、外側から触れてくる仏教的な知識に應ずる家持の内側での気づきを表わしている。

カズナシが家持の用いるような意味で歌の言葉として定着することはなかった。次の時代に見られるのは、「行水に数かくよりもはかなきは」(古今和歌集 卷十一・五二二)とあるハカナシである。ハカ、即ち目途となるものがないという意のハカナシは、外面についても内面についても適用され、その二面性の意識的な使用に歌の修辞は展開する。